

歌舞伎町計画 『書いておけ』

栄耀氏は戦後、東京の戦災復興計画を手掛ける。特に重視していたのは、新宿や渋谷、池袋など中心的な商業地の再生だった。財政難から計画縮小を余儀なくされた面もあったが、土地区画整理事業による基盤整備は、東京の発展を大きく後押しすることになる。その中の一つ、新宿・歌舞伎町は、町の命名者として今も語り継がれている。「栄耀先生は、直接、指導をしてくれていたのですか?」(濱出氏)という問い掛けから、話題は当時の裏話に。こうした功績の裏側に、允氏との共同作業があったというのだ。

允氏は「(栄耀氏は)大学くらいから指導してくれたね。指導なら良いんだ。要するに、仕事をさせるんだ、内緒でね。自分の内職みたいな仕事を全部、わしにやらせていた。いいかげんな人だからね(笑)」と懐かしそうに振り返る。歌舞伎町の街路計画も、「『おう、書いておけ』ってね。歌舞伎町の初めの絵は、みんなわしの絵なんだよ」(允氏)。これには一同びっくり。渡邊氏が「(中央の広場に至る)ジグザグのアプローチはどのような意図だったんですか」と聞くと、允氏は「あれはおやじに教わった。真っ正面に盛り場に行く」と、その盛り場は栄えないというおやじの考えがあったと応えてくれた。浅草や池袋も、允氏が手掛けたそう。栄耀氏からの仕事はいつも突然だった。「『これを明日の朝までにやっておけ』とね。その後、『できたか』と来るんだよ。『まだだ。これから書く』なんて言う」と、怒る怒る(笑)。自分は明日に持っていく約束しているからね(允氏)。意見が対立することもあったという。「おやじの流儀と俺の流儀は、必ずしも同じじゃない。おやじは即断で書き始めるんだ。いい

かげんなもんだよ(笑)。わしは、わりかしじいっと眺めて、それから書き始める。お互い言うことを聞かない方だから、しょっちゅう喧嘩だ。それでいて一番仲が良かった」と允氏。「(指示は)『こういうのを書いてくれ』。こっちは苦労してやるわけよ。(栄耀氏の言った内容を)土台にして自分で勉強する。それは、役に立ったね。だから、普通の人が都市計画の絵を描けないところに、自分は一人前の絵を描いていた」(允氏)。こうしたやり方は、栄耀氏なりの鍛え方だったのかもしれない。允氏は、「教育は難しいね。自分で発見させなきゃ駄目だよ。ポイントだけを言っ、あとは教えちゃいけない。教えたら、その人以上に出られないし、同じものができたら面白くないよ。教わるのでなく、自分で探す。そうすると、良いものができる」と指摘する。栄耀氏にとっても、允氏との秘密の仕事は楽しかったのだろう。「わしには言わなかったけど、周りには得意になっていたみたいだ



演出 憲治 (はまで・けんじ) 氏
都内地方自治体でまちづくり行政などに携わる。栄耀氏の子供向け読本『私達の都市計画の話』に感銘を受ける。60歳

大事だから鍛える

「子どもは非常に大事にしましたよ。だけど、育てる時には本当に厳しかった。怒るときには徹底的に怒る」。それが允氏の話す父親像だ。「写真からは想像つかない。優しいお父さんかと思っていました」と言う濱出氏に対し、允氏は、「私は、よく外にほっぽり出されていた。夜中に泣いていると、隣の奥さんが飛んできて『石川さん、無茶なことしなさんな』ってね(笑)。便所に閉じこめたり、そういうことを自由自在にやっていたね。天真爛漫でしたよ。おかげさまで、怒られるのだけは慣れましたね(笑)。大事だから鍛える。萎縮してしまうと困るけど、反発するくらいの子なら、怒った方が良い」と話す。允氏は、特攻基地で将校をしていた際に終戦を迎えた。東京に戻ってくると目白の家は

牧野 洋久 (まきの・ひろひさ) 氏
大学の土木工学科(都市計画研究室)を卒業後、大手建設会社などを経て、現在は業界紙記者・ライター。35歳



焼失していたという。「帰ってきた時、(栄耀氏が)生きているか分かりませんでした。(勤務先の)東京都に聞いたら、昔の市立一中(第一東京市立中学校、現・千代田区立九段高校)にある分室にいましたよ。行ったら、『おお、帰ってきたなあ!』と大騒ぎでした。私は司令部にいて、死ぬとは思わなかったけど、おやじは諦めていたみたいです」。允氏は、当時をこう思い返す。

ソードと言える。栄耀氏は、「死んだ顔を見るのは嫌いだっ」(允氏)。養父の石川銀次郎氏が亡くなる際、允氏に「死人の顔は見るな。それは決して良い印象じゃない。相手にとっても良くないだろう」と話した。「(栄耀氏は)『何事も良いことで終わらせる』と盛んに言っていた。そういう面では、哲学の人なんだろうね」(允氏)。栄耀氏は晩年、親族に囲まれて暮らした。允氏の奥様・富美子さんによると、毎夜9時になると栄耀氏を囲むように皆が集まっていたそう。濱出氏が「訓辞をするのですか?」と聞くと、「話もなにも、自分が言いたいことを話すんだ(笑)」と允氏。富美子さんは、「早く亡くなるからなのかなあって、後で思いました。だって、毎日でしたからね(笑)」と話す。允氏は「みんな、よく集まったね。やっぱり、それだけ子どもをかわいがっていた、懐いていたんだろうね」と振り返る。

渡邊 耕 (わたなべ・こう) 氏
大手建設会社で開発プロジェクトなどを手がけてきた建築技術者。石川栄耀氏は祖父。允氏は叔父にあたる。49歳



石川 允 (いしかわ・まこと) 氏
石川栄耀氏のご長男。建設省・国土庁(現国土交通省)で、都市計画・建築行政などに携わる。国土庁審議官、長岡技術科学大学副学長などを歴任。現在は同大名誉教授。87歳

～～ 栄耀氏・允氏と新宿歌舞伎町 ～～



現在の歌舞伎町広場
奥は閉館した新宿コマ劇場

新宿・歌舞伎町は、戦争で焼け野原となった後、土地区画整理事業により基盤が整備され、日本を代表する繁華街へと成長した。当時、地元から相談を受けた栄耀氏は、中心に広場を設け芸能施設を集積させる案を提示。その核となる施設が歌舞伎劇場だったことから「歌舞伎町」と命名したが、建築資材統制により歌舞伎劇場は実現しなかった。

碁盤状ではなく、幅員を変えながら折り曲がって広場に至る街路形成が特徴的だ。「盛り場は真っ正面に見えない方が良い」という栄耀氏の理念を允氏がくみ取り、こうした形状になったという。

歌舞伎劇場の予定地は、その後、新宿コマ劇場になるが、2008(平成20)年に閉館。新たなまちづくりが計画されている。